

生きて働いてくださる神

山本披露武

子供の頃の楽しみといえば何といってもお正月。そのお正月が近づいてくると、お年玉をくれそうな人のリストを作って、あのおじさんだったら十銭かな？　このおばさんはやっぱり五銭かな？　といった具合に書き込んでいき、目標に達しなければ、また初めから計算のやり直しをするのである。何のことはない、その頃から経営学(?)のまね事をしていたようなもの。

その甲斐あつてか、会社に入ってから営業部にまわされ、顧客リストを作つての夜討ち朝駆け。

しかし、計画通りには中々いかないもの。胸を張って営業会議に出席できるのは年に二回か三回、あとは、殆ど下を向いて小さくなっているのである。

が、世の中わからないもので、もう駄目かと諦めかけていたようなときに思いがけない注文が入ってくることもあるのである。

そのような時には飛び上がって喜び、ああ、神様はやっぱり生きて働いて下さっていたのだ、と心から感謝したものだ。

## 移住生活の楽しさ

荒井 文

母の命と引きかえに八か月で出生した時から私の移住生活が始まりました。母は亡くなりましたので、新しい両親に預けられました。その両親は転勤族でした。

四歳まではたしか岡山の島でした。その後、青森へ行きました。そのあたりから記憶がすっかりしてきます。

同じ日本なのにまるで外国のように言葉が違い、生活習慣も違いました。子どもの私はすぐに言葉を覚え、家族の通訳でした。家族は私がいないと買物にも行けませんでした。

二年生のころ、群馬県の草津町へ移転。家で温泉に入り、雪や、動物たちとも遊びました。いち早く土地の言葉を覚えたので友人もたくさんできました。今でも各地に友人がいて、文通しています。電話では、いつの間にか昔の言葉を使っています。楽しいです。こうして移住した先々で人々と仲良くすることを学びました。

『あなた自身のように隣人を愛しなさい』マタイ二二章三九節

お散歩 — いただいた時 —

西山 純子

父はお洒落な人だった。衣服も持ち物も。そうして当時ステレオで聴く音楽もクラシック、ラテンに始まり、父の愛用した洋間からは、いつも快いリズムが流れていた。

息子は乳幼児期から、この父の部屋に入っては隣に腰掛け、小さな足をブラブラさせながら、共に過ごすのが好きなようだった。

娘時代の私にとつては、かなり過保護だった父は鬱陶しくさえあつたのだが、孫を愛する様子は、微笑ましいものとして写った。

晩年の父は私の息子とお散歩するのも楽しみの一つで、息子もまた、おじいちゃんとお手をつないであちこち出かけるのが嬉しいことらしく思われた。二人はどんな会話を交わしていたのだろうか。

息子は音楽の好きな少年になり、その方面の学びをし、現在は教会の奏楽者として、父の好きだったバッハの曲も奏でている。

遠く過ぎた時の中に、私は神さまのご計画を覚え、父の愛を想う。

## 驚きの向日葵

松下 勝章

この春、ふと、(向日葵でも撒いてやろう) と思い立って、『大輪向日葵』という種を買って来て、庭に蒔いた。

数日後、プツクリとした、種の皮を被った可愛らしい芽が出て来た。でも周囲の木々の日陰になったためか、上手く育たない。

(ちよつと、場所を移してやろう。ついでに肥料をやって……) そう思って、場所を移し、肥料をやった。

地震があつて、人事異動があつて、すっかり忘れていたけれど、帰省の際に庭を見て、びっくりした。ヒヨロヒヨロの芽が、グングン伸びて、二メートル近くの背丈になつていた。その首の先に晴れやかに大輪の向日葵が笑つていた。ほんの数ヶ月間の出来事。

向日葵は、放射能も食つてしまうという。地震で撒き散らされた放射能も、『彼女』の格好の肥しだ。悲しみや、恐れのを力を吸い込みながら、この夏、『彼女』が、庭先で(楽しい、楽しい、ああ楽しい)と元気に微笑んでいる。

苦あれば楽あり

林 文彦

小五の時、「若い時に苦労しとけば年老いて楽しいことが多い」という言葉を先生から頂きました。また、両親の信仰のおかげで、教会生活を続けてこられたのも幸せでした。

小学生の頃に出会った最初のみ言葉は、『汝の若き日に汝の造り主を覚えよ』でした。私は小・中学生の頃から、先生には大変恵まれました。十五歳から十七歳まで、私は牧師先生の家で暮らさせていただき、その間、ずっとここで暮らすことが出来たらと思っていました。が、思いもよらぬ事に、四人の男兄弟が総て独立をし、やむなく私が実家にもどって、五代目として、六十歳まで、家業を継ぐということになってしまいました。

六十歳で年金生活をするようになり、少年の頃に夢見た文書伝道を思い立ち、イエスの友会でお会いした満江巖先生にお願いして日本クリスチャンペンクラブに入会させていただき、今日まで伝道のための文章の学びをしてまいりました。苦労もありましたが、今は、毎日が幸せです。

## 心の糧

志田 雅美

午後九時。そろそろ時間だ。車のキーを手に、重い腰をあげる。これから隣町の利用者宅に夜のケアに行く。九時半から三十分。たったそれだけの仕事だが、パンを得るためだ。自分に言い聞かせ、くつろぎの空間を後にする。

「ああ、かつたるい」

思わず、愚痴。夜も働こう。自分で決めたのに、愚痴を言うなんてどうかしている。神さま、悪い思いから私をお守りください。祈りながら車を走らせる。

程なく現地に到着。

「Aさん、こんばんは。ヘルパーです」

声をかけ、居室に入る。すると、Aさんが満面の笑みで言う。

「来てくれたの、ありがとう。あなたの顔を見ると、ほっとするわ」

その言葉に肩の力が抜ける。心が楽になる。これこそ、パンに勝る報酬だ。心の糧だ。

頑張ろう。改めて思った。

## ゴスペルに出会って

土屋 理絵

中学から大学までを音楽専門の学校のピアノ科で過ごした。歌は授業で女声合唱、ソルフェージュなどあったにはあったが、ほとんど興味なくひたすらピアノばかり弾いていた。

その私が、十一年前にゴスペルに出会って変わった。「歌うって、楽しい！」心からそう思った。リズムに乗った「オーハッピーデー」や魂から歌いあげる「アメージンググレイス」。それまでの私にはない喜びを感じた。

なぜゴスペルだけは、歌うことがこれほどまでに楽しいのか。その時はわからなかった。しばらく時間が経ち、やっとわかった。歌詞だ。神様をたてる言葉。そして聖書からのみことば。歌の中心には必ず神様がいてくれる。

そのことがわかった時、私はイエス様と出会い、洗礼へと導かれた。

神の家族となった今、愛する姉妹たちと共に賛美をする時が何よりも喜びだ。ゴスペルに出会って、歌う楽しみに出会って、救いへと導かれた。この道をそなえてくださった神様にずっと感謝している。

## 信仰の友と

榎 尚子

礼拝が終わってからそれぞれの部屋に分かれた。久しぶりの縦割りの会である。

教会ではもうかなり前に婦人会青年会壮年会の枠を外してごちやまぜの組織にした。おじいさんおばあさんがほとんどで、現役組はちらほら。どのグループも日常生活の中から証しをしたり聞いたりする。小さい教会でお互いの生活は筒抜けであるが、恵みを語る言葉は人それぞれ、礼拝後の楽しいひと時である。

たまたまその日は何人かが老いをテーマに証した。

八十四歳の彼はどこから見ても非の打ちどころがないクリスチャンだが、家庭での老いの苦しさを訴えた。しかし教会こそが生きがいで、どんな小さな奉仕でもさせてほしいということや、毎日の生活が祈禱会と主日礼拝を中心に行っている様をくわしく語った。

バスを何台も乗りついで教会に来る彼女は昼食会の当番がいかに生きがいになっているかを晴れ晴れと語った。

共に教会生活をする、楽しいことである。



## 友の好意

長谷川和子

肩まで湯に浸かり、右腕を上下に、そして脇の下を開いた形で左右に動かす。その度に痛みが走る。肩甲骨から右腕にかけて、鉄板で固められた硬さの痛みが薄らいでいくようだ。

四月に転倒、右上腕部を二か所骨折した。術後、二日目から高熱のため食事が取れない身でありながら、リハビリが始まった。

肩、特に上腕部は動かさないと筋肉が硬直し、動かなくなってしまうということであった。

厳しいリハビリに音をあげそうになりながらも、リハビリ師の真剣な態度に、「頑張らねば」

と思ひ、病室での自主リハビリも痛みを耐えながら励んだ。

「どう、少しは楽になったかしら」

友は温泉治療がよいと知って、日帰り温泉に車を走らせてくれた。露天風呂の竹藪の葉が心地よい夏風に揺れている。その先の青空に、入道雲がくつきり浮かんでいた。

## 南吉に伝えたいこと

土筆 文香

新美南吉の「でんでんむしのかなしみ」は、美智子皇后が推薦されて有名になった童話だ。

童話には自分の殻だけでなく、友達の殻にも悲しみが詰まっていることに気づくでんでんむしのことが書かれている。

わたしは十代のころ、この童話を読んで号泣した。南吉も自分と同じ悲しみを抱えていたのだと思った。でも、悲しみは自分で克服するしかないというメッセージは、本当の慰めにはならなかった。悲しみが大きすぎて自分の力ではどうにもならなかったからだ。

後に聖書の言葉「悲しむ者は幸いです」と出会い、仰天した。悲しみの近くに神様がおられることを知って、悲しみのあることを嘆く必要はないと知らされた。

神様に悲しみのすべてを打ち明けたとき、神様はわたしの悲しみを喜びに変えて下さった。重荷が取り除かれ、スーッと楽になった。

「悲しみは取り除いてもらえる。生きるって楽しいことだよ」と南吉に伝えたい。

## 母の信仰告白

島本 耀子

地獄も極楽も生きてる内に体験する、死ねば何も無いのだ。と、言っていた母が、震災以来急激に視力が衰え、特養に入った。

環境が変わり、何も出来なくなった日常に、母は鬱々と考え込み、父があの世界から迎えに来ないと嘆く。「何も無い世界から誰が迎えに来るの。お母さんは死後の世界を信ずるようになったの?」。私の言葉に母は黙って頷いた。「お母さんは自分から地獄を作っている」と、さらに言う私に、母は再び暗い顔で頷いた。姉も、神様に触れると話を逸らす母にいつも困っていたが、数日後、母は姉に告げた。

教会のお墓に入ってもよい。父の墓や死後は跡取りの兄に任せる。どうせ、寺院の墓地は三年放置すれば無縁になる。決心した母の顔は、明るさを取り戻して一変していた。

早速、姉の教会の牧師が来て下さった。牧師の話に深く頷き、祈りの言葉も一言一句聞き漏らさずに繰り返し、母は信仰告白の祈りを捧げた。母の余生が楽しみになった。

母のつこことば

三浦喜代子

母は、両脇に妹たちを抱えながら「寝るほど楽はなかりけり」と布団に入った。私とすぐ下の妹は、またかとあきれながらも、静かになった部屋の机に向かった。

父を天に送ってからの母は、夕方五時には食事を済ませ、じきに床に就いてしまう。「いくら何でも早いんじゃないの」と声をかけると「寝るほど楽はなかりけりよ」と、マイペースを崩さなかった。

私はいえ、寝る時間が無駄にさえ思え、いたずらに夜更かしを続けた。今となつては、頑張りもきかなくなり、宵のうちに疲れ果ててしまう。「寝るほど楽はなかりけり、でしょう」と母の声が聞こえてくるのだ。

母は、困った病気一つせず、かつきり九十歳で天に帰った。早寝早起きこそ最上の健康法だと知っていたのかもしれない。神に委ねる信仰のコツをも、悟っていたにちがいない。

『主はその愛する者には寝ている間に、そのように備えられる』

(詩篇一二七篇2節)

## 楽しい時間

加藤 透子

わが家には、二羽のセキセイインコがいる。名前は、ピーピー（男の子）とホタル（女の子）。夫が命名。雛から育てた。

鳥は、規則正しい生活が好き。鳥のおかげで私も規則正しい生活を送れるようになった。朝、ピーピーと泣いて、早く鳥かごのカバーを外してと催促する。私は眠たい目をこすりながら雨戸を開ける。毎朝、餌と水とかごの敷き紙を取り替える。その際、時々、隙をねらって脱走する。おやつには、いちごやりんごやブロッコリー等。なかでも、はこべは大好物。

毎日、決まった時間にかごから出して、部屋の中で遊ぶ。たつぷりと一時間の飛行。私の肩に乗ったり、足に乗ったり……。特に足がお気に入り。靴下の模様が好きなようだ。鳥との時間は私にとって癒しの時間。「鳥は裏切らないよ」と夫の言葉。

今となっては、この二羽の小鳥達は、夫の生き形身となってしまった。

## ビジョンは高く

北川 静江

私に通っている教会は周りが田園でのどかな所にあります。十一年前に創立、新会堂を建築しました。初め教会員は一〇人でした。若い牧師先生夫妻を迎え、五年後ビジョン委員会を立て、教会の隣接地に駐車場を二区画買いました。更に将来のビジョンを掲げました。

「会堂増改築、一つに絞って、二〇一一年に会堂増改築を完成させましょう」と、熱い祈りと献金を積み重ねてきました。

目標かなって今年七月に増築部分が完成し「グレイスホール」と名付けました。皆の顔は底抜けに明るいです。広いキッチン、収納もたっぷり作りました。二階は牧師館です。

年配者の多い教会で、三〇余名の教会員ですが、全く借金なしで完成させていただきましたことは神さまのお恵みです。この会堂が大いに用いられますように祈っていただきます。

ちなみに初めのビジョン委員、後の建築委員として私は奉仕に心燃えていました。

楽園

遠藤 幸治

透析の身になって十八年になった。透析中であるが、隣の患者さんとはまだ一度も話を交わしたことがない。透析機が間にあつて顔も見えず、話したくても話もできない。話す相手は看護師と医師だけである。

明るく広々とした透析室で、聖書をはじめ好きな本を読み、好きな音楽を聴きながら四時間ベッドに繋がれるが、そこは神さまと自分だけの世界である。

神さまの愛に包まれながら、辛い時は神さまの名を呼び、主イエスの十字架が臉に浮かぶ。主にある喜びと感謝の涙で枕を濡らすことが多い。また長い血液回路で十字架を編むこともある。私にとっては誰にも邪魔をされない奥座敷のようであり、また楽園でもある。「透析は神さまの祭壇である」と牧師先生に言われたが、自分もそう思っている。

『嘆きの谷を通るときも、そこを泉湧くところとします』

(詩篇八四篇6節)

## 「楽」考

駒田 隆

「楽」とは、「心身が安らかでたのしいこと」（「広辞苑」）、とあります。古人は、「楽といふは、好み愛することなり。これを求めることやむ時なし」（「徒然草」第二四二段）、と述べて、楽を求めることは、人々の好むものであつてそれは終わることがない、としました。けれども、楽を求め続けていけば、「歓楽極まりて哀情多し」（漢武帝「秋風辞」）、ともなりかねません。

楽をしたい、楽しみを味わいたい、と思うのは、わたしたちの普通の気持ちと言えます。

しかし、主を信じる者にとって、その求める「楽」とは何でしょうか。

それは、主を、信じることによつて得られる、「……心は喜び、魂は踊り、……」からだは安心して憩い、……」（詩編十六編九節）、ということではないでしょうか。

また、楽を、「願ひ求めても、与えられないのは、自分の楽しみのために使おうと」（ヤコブ四章三節）しているからだと知るべきなのです。



終戦後、小学校三〜四年生の頃「火曜学校」（現在の教会学校）へ、フルヤ・森永ミルクキヤラメル二粒が欲しくて、セッセと通った。

炭鉱町の片田舎でも、大晦日の夜には毎年近くのカトリック教会の神父さんが、ブレゼントを抱えて家へやってきた。大雪の中を歩いて来て玄関に脱いだ長靴が、両方とも同じ側の靴だったので、みんなで大笑い。

高校浪人。札幌郊外での屋根裏六畳間に二人で生活。近くの教会の「路傍伝道・夜の集会」に誘われ、なんとその二〜三日後に牧師さんが屋根裏部屋へ訪ねてきてビックリ仰天、でも嬉しかった。

東京オリンピックの観客席からそっと抜け出し、彼女の受洗を祈ったあの時、その時の彼女が今の妻。

教会での結婚式。待望の長男誕生。赤子の手と足をそっと触って、「命」の不思議さと喜びを実感。

その長男も今は二児の父。

## ツーリスト

青葉亜樹子

一人旅が大好きです。十年程前、ベトナムのメコン川に行った時のことです。甲板の物干しロープにはたくさん洗濯物が風に揺れていました。

私は『宿が取れなかった旅行者』になりすまし、一軒の家の戸を叩きました。予想に反して、暖かく迎えられ歓待されました。今の日本ではとても考えられない事です。

日本人として生まれた事に感謝していますが、便利ではないけれど《神様が与えてくださった物だけで生きていける》と《愛されているから》を心から感じとれる旅、海外を歩くことほど楽しいことはありません。

近年は、大きく抉られた大地やオーロを訪ねました。体中の毛穴が開き、心と霊も神様の創造のみわざに歓喜し、涙しました。

神様に自分のすべてを委ね、命を与えられ、生かされていることに心から感謝する旅を望み願い、祈ります。

私はこれからも海を渡る！。

神様がこの世に与えられた物をもっと知りたいから。

御手に繋がれて

有賀 麗子

小雨降る午後、赤いレインコートを着た三、四歳位の女の子を見かけた。母親らしき女性に手を繋いで欲しいような素振りをしたが、一言、二言話すと、後ろから一人でのろのろと歩きだした。泣いているようであった。

その瞬間、幼い頃のことと甦ってきて、おもわず涙があふれた。

五十年以上も昔のことであつた。雪の道の途中で手を繋いでもらいたくて母の手に掴まろうとした。「二人で歩きなさい」と、弟をおぶっていた母は、何度も私の手を振り払った。私は泣きべそをかきながら、必死で母の後を歩いた。気難しい父、姑、小姑との同居で、母は子育てに余裕がなかったのかもしれない。

今、私はクリスチャンになり、どんな時も拒絶されることのない、神の御手に繋がっている。いつも喜び、絶えず祈り、全てのことに感謝しなさいという神の命令は、私の苦しみも、悲しみも、楽しみに変えられるためと信じて、信仰の道を歩いている。